

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 82 回

『「賢明なるオアシス」 ～ 『一日一言』の処方箋 ～』

筆者が理事長を務める恵泉女学園の事務局長から、2021年11月7日（日）『第33回恵泉女学園大学学園祭 2021年度恵泉祭』で、『「生涯就業力推進センター 私が考える生涯就業力論文コンテスト」があります。そこにご出席ください。』との連絡を頂いた。『2021年7月末より本学の在学生に対して募集を開始した。私が考える「生涯就業力」論文第一回テーマ ～ 私のいままで、そしてこれからを見つめる生涯就業力 ～ について、各界をリードする有識者の方々に客員教授としてご参画いただき、本学の生涯就業力推進センター「アドバイザリー・ボードメンバー」兼 本学客員教授の皆様より、専門的な視点から論文の講評をいただきます。』と紹介されていた（画像 1, 2）。

100年前に、一人の日本人が立ちあがった。『武士道』（1900年）を記した新渡戸稲造（1862-1933）である。新渡戸稲造は、国際連盟 事務次長（1920～1926）も務める。新渡戸稲造は 世界中の幸せを願い、世界中の叡智を結集させようと努力した。そして1922年に国際連盟に“知的協力委員会”（後のユネスコ）を参集した。この委員会には 哲学者のベルグソンや物理学者のアインシュタイン、キュリー夫人らが委員として参加、第1次世界大戦後に困窮が著しかった各国の生活水準の調査や知的財産に関する国際条約案を検討し、各国の利害調整にあたった。思えば、今は亡き原田明夫 検事総長と、2000年『新渡戸稲造 武士道 100周年記念シンポ』、『新渡戸稲造生誕 140年』（2002年）、『新渡戸稲造没後 70年』（2003年）、さらに『新渡戸稲造 5000円札さようならシンポ』（2004年）を 国連大学で開催したのが 走馬灯のように駆け巡ってくる。「日本国の処方箋」は、実は「今ふたたび、新渡戸稲造！」に、具象的に内包されているのではなかろうか！ 来年（2022年）は、『「知的協力委員会」設立 100周年 & 新渡戸稲造生誕 160周年』である（画像 3：2016年 本郷の訪問看護ステーションの看護師によって作成された相関図）。

『非専門家が「世間に認められた専門家」になる現象化』の問題点の指摘、『「救済（人間愛）と科学」の懸け橋としての科学者の役割』の提言は、「科学的に分かることと、分からないこと」を明確にし「陣営の外」に出る科学者としての「良心・胆力」を示すものであり、「曖昧なところは曖昧」と説明し、「最初から最悪の状況」を想定し、それにうろたえることなく、冷静に問題解決に当たる「先憂後楽」の姿勢が有用であることは、過去の歴史が繰り返し説明している。筆者は、新渡戸稲造の『一日一言』（1915年）の11月25日付けの文章を改めて読み直した。「事の是非曲直、政治の長短、学理の真偽は、飽くまでも、しかも冷静に明らかに争うべし。一 水かけ論や、一 揚げ足取りは聞かぬもよけれ、いわぬに勝るなり。一」とある。まさに、「賢明なるオアシス」である。



画像 1



<応募内容>
 ・テーマ:私のいままで、そしてこれからを見つめる生涯就業力
 ・1200～2000文字
 ・Microsoft Word 10.5point 横書き
 (募集要項より一部抜粋)

画像 2



画像 3